

辻本雅史著

『近世教育思想史の研究』

——日本における「公教育」思想の源流——

藤本雅彦
桂島宣弘

1

本書は、その副題に「日本における『公教育』思想の源流」とあるように、日本における公教育の特質、言い換えれば、国家と教育とのつながりの特質を、近世思想の中に探ろうとするものである。しかも、その試みが、序章 儒学における教育思想の基本的特質——朱子学を中心に——、第一章 荻生徂徠の教育思想、第二章 折衷学の教育思想——細井平洲を中心に——、第三章 天明・寛政期における徂徠学——亀井南冥の思想と教育——、第四章 亀井南冥の学校論と福岡藩校、第五章 寛政異学の禁をめぐる思想と教育——正学派朱子学と異学の禁——、第六章 国家主義的教育思想の源流——後期水戸学の国家意識と統合論——、終章 結語——統合と教育を中心に——、という章立てから、明らかに、徂徠学の出現というインパクトを受けた後の儒学者たちの思想の検討を通して行なわれているところに本書の特色

がある。なお以下において本書評は、「1」において藤本が第一章から第五章までを、「2」において桂島が第六章を、それぞれ分担して論じていく。ところで、近世思想史の研究という場合には、仁斎・徂徠・宣長といったスターたちが中心になりがちであるが、本書においては、徂徠はむしろ脇役であり、亀井南冥や頼春水の思想と教育についての考察がその白眉を成している。徂徠以後の儒学史の研究を目指す者にとって、本書が、避けて通ることのできな重要な労作となっている所以である。特に正学派朱子学については、例えば、衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』（法政大学出版局）においては、「寛政異学禁の思想史的意義」（同書二二七頁）として僅か数頁で片付けられていることにも見られるように、従来は、特に重要な思想史的意義はないものとして扱われてきたが、本書によって、彼らの思想にこそ近世における公教育の一つの原型と呼ぶべきものがあることが解明された点に大きな意義がある。頼祺一『近世後期朱子学の研究』（溪水社）におけるような実証的な研究とともに、本書によって切り拓かれた地平を通して、彼らについての思想史的研究が更に進められることが期待される。

「朱子学正学派」という用語——明末清初の儒学と日本のそれとの関係について論ずる、荻生茂博「古賀精里」（『江戸の儒学』思文閣出版所収）を参照すれば、「日本における朱子学正学派」と呼ぶべきかもしれないが——は、辻本氏の研究を通して広く定着しつつあるが、そのこの意義は、春水や尾藤二洲らを「朱子学」正学の主張者たち」（衣笠前掲書二二八頁）とする呼称をより簡潔にしたというだけに止まるのではなく、彼らの著作についての根本的な読み換えの中にこそある。例えば衣笠氏の、「朱子

ところで、春水における〈学への確信〉とも呼び得るほどの強い信頼は、辻本氏が引用している「御教導之筋品能立行へれ候へハ、……諂諛賄賂之風自然とやミ、……不正之祈念祈禱……も自然とやミ、忠孝之道理心根より行込厚く、……郷党之礼陸敷、公事訴訟等も無之、……旅人之往来行儀正敷、……売買取引聊無理非道之事無之、……惣て御教導之基本成立によりて花咲実のり候道理と奉祝候」(『政術之心得』第五章二二四頁)という言葉に見られるような、庶民教化に関する手放しの樂觀論と結び付いている。そして、このような樂觀論によって補完された学校組織の階級的秩序化による統合の論理、言い換えれば、「教育」重視の論理に對して、儒学に伝統的な(より直接的には徂徠における)「自得」重視の論理をもって對抗する者が、本書の第三章・第四章において取りあげられている龜井南冥である。

人々に対する樂觀的信頼がなければ、そもそも教育という場そのものが成立し得ないという点を考えあわせるならば、春水の言葉は十分に首肯されるものであるが、しかし、「教導之基本」さえ成立すれば、淫祀・邪宗に惑わされる人も「自然とやむ」というような考え方に対しては、徂徠は、「いわんや民にして戸ごとにこれを説き、その理を喻りて鬼神に惑はざらしむるは、百孔子といへども能くせざる所なり」(『弁名』)と厳しく論難している。そして、辻本氏が指摘しているように、徂徠においては庶民教化の視点が欠落している(第一章六六頁)というまさにこの理由から、朱子学正学派は、徂徠学を批判するのである。しかし、辻本氏も繰り返して指摘しているように、徂徠における「疵病」としての人材は、教育によって作り上げられるのではなく(『「氣質

不変化の説」第一章三七頁)、むしろ、「優れた人材は、いつの世にも必ず一定の割合で存在している」(『「人材恒在の法則」第一章三九頁)のであり、したがって、「才智ある賢才を見いだす君主の徳」(『「智」第一章四三頁)こそが重視される。徂徠にとって学問は、教えられるものではなく、「自得」すべきものだったからであり、そして、「教育は、学習の『ワザ』(方法)を教えるだけで、後は学習者の自発的学習による『自得』を期待する、もしくは、自発的学習を促すために『カタハン』(示唆)を側面から与えるのみ」(第一章五五頁)だったからである。

こうした「自得」の重視は、南冥にも受け継がれている。「経世家」(第三章一四二頁)であるとともに「古医方家」(同前)でもあった南冥にとって、「病氣の変化無窮に對して自在に對応できる主体の確立こそ、医師としてめざす立場」(第三章一四三頁)であり、それは、「理論ではなく、具体的な現実相(『事實』)にのみ依拠する」(第三章一四四頁)という「自力体得主義」(同前)でもあった。そしてそれは、「そのまま『学問』にも妥当」(同前)しており、「教条主義的理論の徹底した拒否と、事実 に即した經驗主義」(同前)、『自力』『自得』という強烈な主体的立場の確立」(同前)、「いかなる現実的諸課題にも、自在に對応し得る主体の創出」(同前)が、南冥にとっての切実な学問的課題であった。南冥の『論語語由』は、こうした課題に應えて、ドグマやイデオロギーによる解釈を排除し、訓詁においてさえも、「孔子は未だ嘗て仁を話して以て人に教へず」(『家学小言』第三章一四一頁)と、『論語』についての解釈や学説を拒む(第三章一四一〜二頁)という困難な営みを通して、「孔子の言葉によってのみ

孔子を語らせ、孔子の原意を復原する」(第三章一三八頁)ことを目指して達成された豊かな成果であった。

南冥に受け継がれた「自得」の重視は、しかしながら、徂徠による、「幕府における官制教育」(『公役ノ稽古』)は講釈の一方的な教育」(第一章六一頁)であり、「学習者の自発的な学ぶ意志を阻害している」(同前)とする「官制教育」の否定へと向かうものではなかった。事実、南冥は天明四年(一七八四)に福岡藩において同時に開校された東西二つの藩校の一方である「西学問所(一名甘棠館)」の「総受持」に就任しているのである(第四章一六七頁)。しかも、「肥後物語」において南冥が語る学校制度のあるべき姿は、徂徠におけるような「生ずるを俟つ」(『学則』)という悠然としたのではなく、「藩士たちの人物は、学問修学上の『学校役人』と、藩政の職務上の『考績の役人』とによって、二重に評価され、掌握(監視)される体制」(第四章一六三頁)であり、「人材掌握の徹底化と合理化のシステム」(同前)であった。同じく「自得」を重視する徂徠と南冥との間のこの隔たりは、一体何に起因するのだろうか。

この問題について考える上で、福岡藩に藩校が設立される前年、学問所設立の諭告が発せられた「天明三年(一七八三)」のこの時点で、藩にとっては事実上藩主不在という事態にあった(第四章一六八頁)という辻本氏の指摘は興味深い。辻本氏が述べていたように、徂徠の人材登用論は、個性ある人材を見いだすという君主の経験的洞察力を起動力としていた。しかし、天明初年の福岡藩においては、うち続く不幸のために、統率力を発揮すべき当の君主自身が、早逝したり、あるいは幼君であるという「被打統

御大變」の最中にあつたのである(同前)。この危機は「『家老中』が藩主の『御名代』という形で執行すること(つまり、家老たちの合議による集団執政の体制)」(第四章一六九頁)によって乗り切られたが、しかしこうした状況下では、徂徠の人材登用論が、そのままの形では受け入れられないことはむしろ当然であるだろう。そして、君主の個人的力量に依存することなく「『家老中』による執政に協力(『御奉公』)して、この危機を乗り切ることに貢献できるすぐれた藩『官僚』」(第四章一七〇頁)を育成するために藩校が設立され、しかもその際に、南冥は、「相当密接に、むしろ南冥の構想にもとづいて事が運んだ」(第四章一七二頁)と辻本氏は推定し、そのことは、「半夜話」の成立年代の考証を通して実証的に明らかにされている(第四章一七四頁以下)。

南冥の思想と教育についての辻本氏の考察は、説得力に富み、また多くの示唆を読む者に与える力作であるが、あえて評者の不満を言わせてもらえば、辻本氏の「十八世紀後半の徂徠学や折衷学において、強烈な実践主体形成の思想的営為があつたことは、本稿において明らかにしてきた。しかし、南冥学においてみた通り、そうした『主体』は、それを内面からささえる形而上学や世界観を欠落させており、この点に、徂徠学成立以後ほぼ通有の脆弱性をもっていた」(第三章一五三頁)という指摘や、そして、こうした脆弱性の故に徂徠学や折衷学は、「天人合一の世界観のもとに、世界に対する責任主体として自己を鍛えあげていった朱子学や陽明学の実践的な倫理主体に克服されてゆくことになる」(第三章一五三―四頁)という位置付けは、補注でも述べられているように(第三章一五六頁)、宮城公子「変革期の思想」(『講座日本

史』四東京大学出版会)や「幕末儒学史の視点」(『日本史研究』二二二)などによりかなりすぎた理解ではないかという点である。さらに言えば、一切のドグマやイデオロギーを拒絶することの上に築き上げようとした南冥の学問的営為の意義を、彼が排除しようとしたその当の「形而上学や世界観」の欠落の故に撃つという方法は、少しフェアーではないように評者には感じられる。また辻本氏は、徂徠学においては「君主は、超越的な『天』の権威に重なる形で、その強力な超越性が保証されていた」(第五章二二五頁)とし、その人材論の特質も、「実は君主の超越的権威こそ、家臣のもつ個別的な『才』を生かすためのものといった構造」(第一章四五頁)にあると捉えており、それは、丸山真男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会)を基本的な下敷きにした理解であるが、本書の刊行後、子安宣邦『事件』としての徂徠学(青土社)が出版され、丸山氏によって「徂徠を通じて欺瞞的に、饒舌に語られる絶対的支配者の論理」(同書四七頁)のもつ虚構性が暴露されてしまった現在、この問題については、改めて考え直す余地があるように思われる。

紙数の都合により、細井平洲についての辻本氏の考察に触れることができなくなってしまったが、折衷学に対する従来の評価が、例えば、相良亨『近世日本における儒教運動の系譜』(理想社)においては「学的主張をもたず、主観的主張」であるとされ、衣笠氏によっては「恣意的ともいえる相対主義」「政治従属」(前掲書)であるとされる(第二章一一二頁)のに対して、辻本氏は、平洲が、「藩主の誠実なる仁政を前提に、藩主権威の強化と、君の徳や恩を機軸にした藩内領民の全体としての統合の理念や論理を、

展開し」(第二章一一三頁)、その教化論が、「改革の基調をなす理念であるとともに領内統合の論理として提示されたイデオロギーであった」(同前)ということをも、「平洲の徹底した愚民観」(第二章一〇三頁)の読み換えを通して明らかにしている。この読み換えによって初めて、平洲が諸大名のブレンでありながら、同時に民衆の広汎な支持をも集め得たことの秘密が解き明かされたと言えるだろう。

2

以下では第六章 国家主義的教育思想の源流——後期水戸学の国家意識と統合論——について取り上げていきたい。言うまでもなく、後期水戸学については、尾藤正英氏の「水戸学の特質」(『岩波日本思想大系・水戸学』所収)が著されて以降、徂徠学の影響が指摘され、旧来の朱子学的大義名分論に連なる思想とする説が改められて今日に及んでいる。辻本氏も基本的にこの見解を継承して持論を展開されているが、前章までの論旨からすると注目すべき論点が提出されていることに気付かされる筈である。すなわち、辻本氏は、徂徠学からさらに折衷学・正学派朱子学の統合論・教化論の系譜の帰結として後期水戸学を位置づけているのである。本章自体では、このことが明確に語られているわけではない。しかしながら、本書を読み進んできた者にとって、何よりも本書の最終章に後期水戸学が位置していること自体によって、そのことが明確に看取されることになるわけである。結語の部分で辻本氏はこのことを次のように述べている。「朱子学(正学派朱子学)の『学統』の論理は、後期水戸学の名分論につながる。……後期

水戸学は、正学派朱子学の統合論を國家論的に再構成し直し、國家的集中と動員のイデオロギーを再構築したとみることができ。】(三四〇—一頁)

後期水戸学の研究状況に照らすならば、この広い流れに立っての論点こそ、まずこれまでの学説を革新するものであると評するのであろう。尾藤氏が徂徠学の影響を見たことに加えて、さらに寛政期の思想状況こそ後期水戸学と密接な関連にたつ前史であることが主張されているからである。こうした論点は、ひるがえって最近藤田寛氏などによって寛政前後の朝幕関係の変容を幕末の前史として捉える視点が提出されている。『寛政期の朝廷と幕府』『歴史学研究』五九九号)ことと関連させるとなかなか興味深いものがあると言えよう。藤田氏は、政治史の観点からではあるが、寛政期の祭祀の復興や松平定信の大政委任論の表明、幕府による対外問題の朝廷への異例の報告等が、いずれもきたるべき幕末の朝幕関係の「予行演習」的意義を有することを明らかにしているが、思想的にこれを捉え返すならば、寛政期を一つの画期として新たな國家論が胚胎しつつあったということであり、この意味でも後期水戸学の統合論や國家論の前史が当然にも想定されてしかるべきであるからである。辻本氏の論点は、したがって今後の後期水戸学研究にとって欠くべからざるものであり、寛政以降の政治史的研究の今後の進展とも絡めつつ、さらに継承・深化させられるべきものであると言わなければならない。

とは言え、後期水戸学に限定して考えてみると、いくつか問題がないわけでもない。まず辻本氏は、既述した正学派朱子学と後期水戸学の関連を説きたいからであらう、後期水戸学——会沢安

が中心となって分析されている。辻本氏の「國家主義的教育思想の源流としての水戸学」という観点に立つならば、藤田東潮『弘道館記述義』が取り上げられていないのは疑問であるが、紙幅の關係もあるので指摘するに止めたい——の儒教的(朱子学的)性格を強調しておられる。例えば、「天」や「道」といった概念が基本的に儒教的概念であることが述べられ(三一—四頁)、そうした「儒教的普遍」に立脚すればこそ、会沢学が国学と異なって西洋に対する対抗論理としての体裁を有したとされている。しかしながら、他方でそれは「普遍のよそおい」であるとも述べられており、読む側にはしっくりこないものが残る。それは、恐らく辻本氏が会沢安に即してその論理を再構成するに急であって、「天」や「道」「自然」については、その論理を構成する靜態的な儒教的「概念装置」にすぎないと見ているからではなからうか。無論、しばしば指摘されているように後期水戸学は「危機の政治神学」であり、政治的プロパガンダとしての色彩を色濃く纏っている以上、その論理こそ問題であり、概念装置自体は中心的に分析するに値しないという見方が支配的であり、事実これまでの研究でも概念装置に立ち入っての分析は僅かであるか、あるいは徂徠学的要素や朱子学的要素の抽出に止まるといふ現実が存する。しかしながら、私は後期水戸学の論理もさることながら、その概念の分析がきわめて重要であると考えている。言うまでもなく、後期水戸学の論理・天皇論の中で、儒教的概念自体が変容・風化した筈であらうし、それこそ近代における儒教の展開をめぐる前提ともなる問題を提出していると考えられるからである。この意味では、寛政期以降の思想的展開との関連において、「天」や「自然」と

いった概念が如何に後期水戸学へと転回し変化するのかわかという問題を是非辻本氏に俎上にのせて頂きたかったと思つた次第である。

ところで、後期水戸学の儒教的性格を強調することによって、辻本氏は後期水戸学と元来の儒教（中国の儒教）の有する宗教性との関連という、これまで比較的等閑視されてきた問題を抉り出した点が注目される。すなわち、辻本氏は後期水戸学の「父子分身体の義」を「中国儒教の基盤をなした……礼教的儒教の受容」「孝の宗教的理解」と考え、「死生論を説かなかつた……近世儒教の弱点に、会沢は気づいていた」と見る。旧来、後期水戸学の祭祀論を国学や徂徠学から説明するのが一般的であつたことを考えるならば、中国儒教における「孝」や「礼」の有する宗教性や祖先崇拜との関連で説く辻本氏の論点は独特のものであり、今後深められねばならないものであると言えよう。しかしながら、辻本氏は会沢が近世儒教の弱点に気づいていたことに続けて「つまり、近世儒教は民心を十分とらえていないと考へていたのである」（三一〇頁）としている点には若干の疑問を感じざるを得ない。何故なら、民衆に儒教が十分に浸透してゐたとは考へられない近世社会にあって、果たして民心統合のための祭祀という会沢の発想は中国儒教の祖先崇拜や「礼」の延長で捉えられるものかどうか疑問であるからである。確かに、辻本氏が前提として捉えている前期水戸学と「礼教的」儒教の宗教性との関連は想定されようが、会沢の祭祀論には儒教の他にもあまりにも多くの思想的要素が混入しており、これを儒教の祖先祭祀論等からのみ説明するのは無理なのではないかと思つた。

この他に注目すべき点は、辻本氏が後期水戸学の主張には近世社会の武士の意識に合致するものがあつたとしている点である。例えば、その攘夷論や西洋認識は、幕藩制社会にもともと内包されていた意識を前提としていた点（二七四頁）、会沢の「君臣天合」という忠孝一致論は主従関係が固定化している幕藩制下の武士にとつてはむしろ定着していた意識であつたことの指摘（三〇二頁）などである。後期水戸学の受容基盤に踏み込んだこうした指摘はきわめて重要であろう。辻本氏は、久留米藩における後期水戸学の受容について、こうした視点を生かして「天皇を頂点とした国家祭祀論であるよりも、やはり忠孝道德にもとづく武士意識の喚起の側面であつたことを推測させる」（三二二頁）と的確な分析を加え、それこそ「会沢国体論の思想的結節点」であつたとしている。そして、国家の意識への「覚醒」も、こうした回路を経て顕現するところに近世から近代にかけての日本における国家意識の問題性を見ておられるのである。傾聴すべき見解であると思う。

以上、浅学の身であり、かつ著者に日頃からお世話になりつつも縷々私見を述べてしまつた。はたして著者の意とするところを理解し得ているか不安を禁じえないが、著者の御寛恕をお願いする次第である。

〔付記〕 この書評は、近世思想史研究会の四月七日に行われた例会での発表をもとに、それを原稿化したものである。

（A5判）三四九頁 索引九頁 一九九〇年二月 思文閣出版
五八〇〇円）

（藤本・帝國女子短期大学助教授
（桂島・日ノ本学園短期大学助教授